

三浦綾子と土井たか子―非戦の思想

山内 亮史

一〇月三〇日、私は韓国の水原大学との学術交流で、三浦綾子の文学思想―戦争責任から戦後責任へと題する講演を行っていた。まさにこの日、夫の三浦光世さんが亡くなったのである。『氷点』五〇周年の今年の様々な行事での役割を果たしつつ、力尽きたのであった。光世氏はほとんど一体となって三浦綾子を支えた。

廻り続ける独楽の芯に揺るがぬものを持っていることがすぐれた作家の条件である、と言ったのは梅崎春生であったと思うが、三浦綾子のそれは一七歳の自身が負った戦争体験、それも加害者としての歴史的自覚ともいふべきものであった。

一つは、昭和一四（一九三九）年、空知郡歌志内神威小学校で自己の無知から来る「皇国民錬成」の熱血教師として生きた悔恨である。彼女はいう。「わたしには、昭和一六年五月のその時点において日本の国は果てしなく栄えていくように思われた。そうしか映らぬ幼いわたしであった」（『石ころのうた』）。二つは、日本人として為した東アジアの民衆への加害責任の自覚である。その自覚と反省を基とした和解なくして戦後は終わらぬとする姿勢である。

昨日まで教えていた教科書に墨を塗らせるというだけで教師体験を終えた彼女は、ほどなく結核を発病、後、脊椎カリエスを併発し、

十三年間の闘病生活を送ることになる。これを自己処罰として内省し、キリストは己が罪を負って十字架にかけられたのではないかと考え、入信に至る。

今回の韓国での講演で、私は三浦綾子の最後の長編小説『銃口』について言及し、その前半と後半に登場する金俊明という韓国人の役柄は、彼女の生涯を貫く戦争と人間という普遍的な主題と向き合った末の希望と救済の象徴として描かれている、と話した。そして、戦争への準備はまず、国家による銃口が国民に向けられるところから始まることを、教育活動としての「生活綴方」運動と治安維持法の関係を通して自身の教師体験から描こうとしたのである、と話した。

講演の後の質疑で、中国からの留学生が、自分は日本人からこうした話を聴いたのは初めてであり、どうしたら旭川大学に入ることができるのか、と質問してきたのには驚いた。「戦争への準備が戦争そのものへとつながるのです。平和な世界が欲しいと思うなら、平和の準備をすることによって平和を達成しなければなりません。」

これは一九四一年一月八日、日本の真珠湾攻撃によって三五〇〇名の死傷者を出し、怒りに燃え、開戦に湧き立つアメリカ上下院で、四七〇名の賛成票に対し、ただ一人反対

票を投じたモンタナ州選出の女性議員ジャネット・ランキンの言葉である。投票の翌日から、「彼女の事務所の電話は怒り狂ったように鳴り響き、郵便配達員が不愉快な手紙の束を持って来る日が続きました」（メアリー・オブライエン『非戦の人ジャネット・ランキン』）という。彼女はその後、選挙で落選する。モンタナ州は後に、マンズフィールドという、民主党の院内総務を務め、駐日大使になった大物議員を輩出した。彼は、大使在任中に土井たか子と交流を深め、引退後、モンタナの自宅に彼女を招待する。彼女の芯のある姿勢を愛したのであろう。

その土井たか子が逝ってしまった。彼女は晩年、吉武輝子と対談し、北欧の女性と平和を語り、自分の姿勢について次のように言っている。「女性にあまり苦勞がなかったと思ったら全然違うの、大間違い。女性が苦勞して、そういう経験があつてこそ一つの取り組みというのが生きて動くのであつて、天が与えたものじゃないのよ……」そういう点では戦争だつて戦争で何も解決できないということがやつと人類の間で、互いに共通の認識になってきたのよ。世の中は、人がやつてくれると思つている間は絶対にだめなのよね。わたしたちの先輩がどんな苦勞をしたか、どれだけそのために犠牲を払つたかということを思いながら、それを自分たちの活動に活かすという点が強くなるわけね」（土井たか子・吉武輝子『やるつきやない！』）。三浦綾子と土井たか子。生前幾度か話し合うことができた宝石のような時間を思い出す、私は肅然とする。

（へやまうち りょうじ・旭川大学学長）